

## オンライン演題登録事始め

独立行政法人国立病院機構理事長  
元日本循環器学会理事長

矢崎 義雄

今日では医学系学会の学術集会にとって当たり前になっているオンライン演題登録を、UMINの全面的協力のもとで世界に先がけて成功することができたのは、1998年3月に東京で行われた第62回日本循環器学会学術集会であった。当時私は、日本循環器学会理事長と第62回学術集会会長を兼任し、このプロジェクトを積極的に推進させるのが比較的容易な立場にあった。今回の記念講演にあたり、当時の記録について日本循環器学会事務局、学術集会を担当したコンベンション会社などに問い合わせしてみたものの、全く残っていなかった。運よく当時私が所属していた東京大学医学部第三内科で学術集会案内用に作成したホームページ(<http://square.umin.ac.jp/jcs62/index.html>)が残っているのをみつけることができた。このホームページを10年ぶりに開き呼び起こされた記憶を頼りに、当時を振り返ってみたい。

1997年4月に遡る。1年後に予定されていた学術集会の事務局を第三内科内に立ち上げた際、日本の医学系学術集会として最大規模になった日本循環器学会学術集会を、会員の利便性を高めながらも合理的にコストダウンして運営できないか、事務局スタッフと協議を行った。「最近、アンケート調査をインターネットで行っているのをみかけるようになった。あいつインターネットを介した直接入力的方式を演題登録に応用できないだろうか」杉山卓郎先生（現伊藤忠商事健康管理室長）の一言がきっかけとなり、小室一成事務局長（現千葉大学教授）山崎力先生（現東京大学特任教授）らが中心となって「オンライン演題登録特命チーム」が発足した。英語環境で対応するだけでよい米国心臓協会（American Heart Association, AHA）学術集会ですら行っていないシステムを、どこよりも早く日本語環境で構築しようという構想である。「数カ月の準備期間しかなく危険ではないか、次回への引き継ぎにしたら」という意見もあったが、よくよく調べてみると、日本の生理学関連の研究会が数ヶ月前に数十～百題程度のオンライン演題登録を行っていることが判明した。高校時代の同級生で、東芝のエンジニアであった森健一君がはじめて日本語のワープロを開発し、ノートパソコンに組み入れ爆発的に普及したことを間近で経験していたこともあり、「これはいける」と確信し、UMINの助教授になったばかりの木内貴弘先生に5月の連休明けに相談をもちかけたところ、「まさにそのようなプロジェクトを考えていたところですよ」ということで、以後はとんとん拍子で話が進んでいった。こちらからおおまかな企画案を提出し、約1週間でデモ版が仕上がってきたのである。それには当時UMINに出向していた日立ソフトの高橋進さんの献身的な頑張りが大きかったと聞いている。

最初にこちらからお願いした仕様は以下のようなものであった。

1. 日本語、英語ともに登録でき、それぞれ字数制限を設定する。

2. 図表を添付できるようにする。その際には制限字数を減らす。
3. 氏名、所属などに必須情報をいくつか設定し、それらを入力しないと登録できないようにする。
4. 新規登録に続いて登録期間内であれば修正、削除が自由にできるようにする。
5. 登録者に任意のIDを設定してもらい、それと自動発行される整理番号を使って修正、削除を行えるようにする。
6. 電子メールアドレスを登録すると、演題の新規登録、修正、削除を行った際、その作業が正しく行われたことを知らせる電子メールが登録者に自動的に送られるようにする。
7. 下線、太文字、イタリック文字、上付き文字、下付き文字が使えるようにする。
8. 登録（新規登録、修正、削除）する直前に、登録者が入力した情報を一覧できるようにする。
9. 練習用の画面を作成する、ただし本登録用と明確に区別できるようにする。
10. 所属機関を複数（最終的には4つ）登録できるようにする。

第一に考えたのが、演題登録する学会会員が便利だと実感できる仕掛けであった。たとえば上記の4は、それまでの抄録用紙の郵送ではまず不可能だったことであろう。デモ版が使えるようになってから約3か月間は学内外の循環器科の先生方、海外へ留学している先生方、あるいは医学とは全く関係ない方々にも個人的にお願いして、いろいろな環境下で試していただき、その感想、意見をもとにして改良が続いた。たとえば、文字化けしないようにJIS規格外の文字を登録できないようにする、図表をJPEGファイルに変換するソフトを無償提供するサイトの紹介、各入力覧にわかりやすい見本をつける、といった作業を重ねていった。当時群馬大学循環器内科に転出していた永井良三先生にも実際に入力しての感想、改良点など貴重な意見をいただいた。また、コンピューターに詳しいある先生からは半角スペースを数十回打った後続けてリターンすると文字化けするといった細かいバグ指摘を受けたこともあった。こういった100名に近い方々のご協力もあって、3ヶ月後の8月半ばに、ある程度自信をもって正式に運用を開始するところまでこぎつけることができた。

「オンライン演題登録だけだとインターネット環境を使うことのできない会員から演題登録の機会さらには学術集会参加の機会を奪うことになるのではないか」という意見も大きかった為、従来通りの抄録用紙を郵送する方式と、インターネットほどは抵抗感のないと思われたソフト内蔵のフロッピーディスクを配布してそれにデータを書き込んでもらって郵送してもらう方式を併存させることとなった。このフロッピーディスク方式ですらそれまでの学術集会で行っていなかった方式ではあった。ただし、なるべくオンライン登録に誘導したいという思惑もあり提出期限を別日に設定することにした。

抄録用紙郵送                      1997年 9月10日必着  
フロッピーディスク郵送      1997年10月11日必着

それぞれ1週間程度ずらすだけだった事務局案を会長一任で強引に変更したが、結果的にここまで大きく締め切りをずらしたことが、オンライン登録を強力に推進することにつながったようである。抄録用紙11演題、フロッピーディスク約50演題、残りの約4,000演題はすべてオンライン登録という結果となった。ちなみに2年後の第64回日本循環器学会学術集会からは、用紙、フロッピーディスクともに廃止しオンライン登録のみとなった。これも世界初の成功であったと後日木内先生から聞いた。

約3か月の準備期間中に、オンライン登録の使い方をホームページ、会告等でアナウンスすることに努めたこともあり、8月半ばから11月までの約2ヶ月半はこれといった問題も生じなかったように記憶している。ただ比較的細いインターネット回線を使っていたある私立大学の先生や、自宅から電話回線でアクセスしようとした先生から、画面移動にかかる時間が長く途中で回線が切れてしまうというお叱りの言葉をいただいたことはあった。

10月11日を過ぎフロッピーディスク登録が締め切りとなり、約4,000題がオンライン登録となるであろうことが確定してもしばらくの間はオンライン登録総数が数百題に届かなかったが、「おそらくは最後の1週間に大量に登録されるだろう。同時に数千のアクセスがあっても十分に処理できるサーバーを使っているから大丈夫」という木内先生の言葉もあり、比較的安心して臨んでいたところ、締め切り数日前になってとんでもないことがわかり、事務局一同青ざめることになる。10月末にサーバーのおかれている部屋がまる一日停電になるというのである。病院全体の電気系統の定期点検のため日程変更はできないという。木内先生からは、サーバーを停電しない部屋に移すことは可能だという提案も出されたが、それでもいくらかのリスクを覚悟しなければならないということであったので、オンライン登録を1日休止するかわりに登録期限を1日延長することとし、インターネットと電子メールで学会会員に連絡し、なんとかことなきを得た。たとえば、「勤務の都合でその一日しか演題作成作業に使える時間がない、なんとかならないか」といったお叱りを受けるのではないかと、そういった場合は例外を認めざるを得ないのではないかと、とも相談していたのだが実際にはこのような連絡はなかったようである。したがって、オンライン登録の締め切りは、1997年11月2日午前6時となった。この日には日立ソフトの高橋進さんが湯島のホテルに待機するという念の入れようであったと記憶している。

週明けの11月4日、木内先生、高橋さんからオンラインで登録された約4,000題の情報を直接受け取り、初めてのオンライン登録は無事一段落となったが、そのあと従来以上の事務作業が待ち受けていた。これまでは、各登録者が抄録用紙を10部コピーして学会事務局に郵送していたため、送られてきた抄録用紙を査読者毎に振り分ける作業のみだったが、この年は4,000演題を各10部ずつ印刷する作業が加わったのである。第三内科のいくつかの研究室のプリンターを総動員して対応した。この印刷の期間が米国心臓協会学術集会と重なり、主だった事務局医師が米国出張で不在となってしまう、研究室の助手の方(ほとんどが女性)に

数日徹夜して作業してもらったように記憶している。実は、今では普通に行っている「オンライン査読」についても木内先生から、「可能です。いっそのこと始めましょうか」と打診があったようにも記憶しているが、インターネットの扱いが必ずしも得意でない先生も査読に加わるため、この提案は使われなかった。したがって、「オンライン査読」が一般的になるまでにはあと数年を待つことになった。

オンライン登録を行うことでプログラム編成が格段に速くかつ正確になったのは間違いない。前年までは、演題名、著者名、所属機関名をすべて別途入力してプログラムを作成していたため、最終プログラムに誤字等が出ることをゼロにはできなかったが、こういったミスが全くなかった。さらに会員にとって便利になったのは、抄録全文の検索がインターネットで簡単に行うことができるようになったことだと思う。たとえば、c-fosという遺伝子について言及している抄録346件がたちどころにリスト化されるのである。これは今も残っている第62回日本循環器学会学術集会採択演題検索 (<http://center2.umin.ac.jp/circ-bin/search.cgi>) で改めて行った結果である。ある出版関係の方から、「約半年前に開かれた第45回心臓病学会のプログラムに記載されている演題から氏名、キーワードを選び第62回日本循環器学会学術集会の検索システムに入力すると明らかに同じ内容の二重投稿がいくつもみつかった」と指摘があり、ちょっとした問題になるというおまけまでついた。

オンライン登録成功の最大の功績者は木内先生であることは間違いないが、あらためて、当時の山崎先生をはじめとする事務局スタッフ、それからこの劇的な変化に不満を表明することもなく見事に対応した約三万名の日本循環器学会会員に感謝の気持ちを捧げたい。